小悪魔系後輩カノジョと
囁きエッチなお家デート♪

※一部本編と異なる場合があります

●トラック1

陽奈　「だ～れだ？」

陽奈　「あははっ、先輩、驚いちゃいました？　えへへー、はい、あたしっす♪」

陽奈　「もー、今日はせっかく一緒に帰ろうと思ってたのに、一人で勝手に帰っちゃうなんて、酷いっすよ～？」

陽奈　「恋人を放置プレイするだなんて、先輩ってドＳさんなんっすか？」

陽奈　「え、教室まで来てくれてた？　あちゃー……それはごめんなさい。ちょっと職員室まで呼ばれてたのでタイミングが悪かったっすね」

陽奈　「でも、だからって先に帰ろうとするなんて、ひどくないっすか？　先輩、もしかしてあたしのことそんなに好きじゃなかったり～？」

陽奈　「あははっ、そんなに慌てなくてもいいっすよ～♪」

陽奈　「あんまりカノジョとくっついてるとこ、見られたくないんすよね？」

陽奈　「恥ずかしいのは分かりますけど、それはちょっと自意識過剰っすよ～？」

陽奈　「まぁ、確かに……あたしって、結構可愛いから、周りの人からは嫉妬されちゃうかもっすけどね～」

陽奈　「つかっすよ？　可愛いカノジョがいたら、フツー見せびらかしたくならないっすか？」

陽奈　「『こいつ、俺のカノジョなんだぜ～』って、周りに自慢したくならないっすか？」

陽奈　「ふむ、恥ずかしいかぁ。まぁ、先輩はそういう人っすよね」

陽奈　「あたしを置いて先に帰っちゃったりするし……先輩って、ひどい人ですっ！」

陽奈　「ほんとは、あたしのこと、全然好きじゃないんだぁ……ぐすっ……」

陽奈　「むふふ、なーんちゃって。とはいってもちょっとは傷ついたので」

陽奈　「あたしの言うこと聞いてくれたら、許してあげなくもないっす」

陽奈　「ふふー、素直ですねぇ。先輩のそういうとこ、好きっすよ」

陽奈　「あ、それでですね。先輩のご両親、しばらく旅行に行ってるらしいじゃないっすか」

陽奈　「置いてけぼりで可哀想ですねー……じゃなくって、えへへ」

陽奈　「あたしとしては、先輩がちゃんとご飯食べてるか、心配なんっすけど」

陽奈　「どーせカップ麺とかで済ませちゃってるんじゃないっすか？」

陽奈　「あははっ、その顔、図星っすね？」

陽奈　「もー、ダメっすよ。受験が終わったとは言え……ううん、終わったからこそかな」

陽奈　「栄養をちゃんと摂らないと、これから先辛いっすよ？」

陽奈　「ふふー、あたしこう見えて、意外と料理は出来る方なのでー……」

陽奈　「ご両親がいない間は、しっかりと栄養管理をしてあげるっすよっ！」

陽奈　「えへへ、なんだかこういうの、恋人っぽくていいっすよね」

陽奈　「……むー、この期に及んで、まだ渋るんすか、先輩……」

陽奈　「うわーん、やっぱり先輩はひどい人だー、あたしのことなんて、全然好きじゃないんだー」

陽奈　「……ちょっとは反応してくださいよ。それとも、認めちゃうんすか～？」

陽奈　「まー、先輩がいくら嫌だって言っても、一度告白にＯＫもらっちゃいましたからね」

陽奈　「ずーっとつきまとっちゃいますよ。なんたって、恋人ですから……ね♪　ふふー」

陽奈　「……ふっふっふ、観念したっすか？　……そうですか。先輩が聞き分けが良くて、あたしも嬉しいっすよ」

陽奈　「……って、どうしたんすか？　そんな疲れた顔をして」

陽奈　「うーん、やっぱり、栄養が足りないんすね！」

陽奈　「よーし、そうと決まれば、善は急げっすね！　早く先輩んち行きましょ～！」

陽奈　「ほらほら、ぐったりしてないで。置いてっちゃいますよ～？」

陽奈　「あはは、久しぶりの先輩んち、楽しみだな～」

陽奈　「先輩、おそーい！　あたしが先についたらー、今度アイスおごってくださいよー」

●トラック２

陽奈　「ふー、食べた食べた。ありあわせの材料でも、結構なんとかなるもんっすね」

陽奈　「いやー、これだけお料理の出来る女の子ですもんね？　お嫁さんにしたいって思っちゃいますよねっ？」

陽奈　「……って、スルーはやめてくださいよぉ。あたしが空回りしてるみたいじゃないですかぁ……」

陽奈　「そもそも……先輩が唐変木だから、あたしがこれくらい積極的にならないといけないんすよ？」

陽奈　「まったくもー……責任取って欲しいもんですよ……」

陽奈　「あ、食器を片付けてくれるんですか？　じゃあ、おまかせします。サンキューです！」

陽奈　「……さて……それじゃぁ、今の内っすね。むふふ」

陽奈　「……よし、侵入成功」

陽奈　「むー……ベッドの下は定番、かと思ったんですが……それらしきものはないっすね……」

陽奈　「本棚とかも難しそうな本ばっかりだし、一体どうやってオナニーしてるんでしょう……」

陽奈　「全く、あの先輩と来たら、ホントーに蛋白（たんぱく）で、うー……あたし、困っちゃうっすよぉ……」

陽奈　「あっ……えと、あの、その、これは」

陽奈　「すいません、エッチな本がないか探してました」

陽奈　「えへへ、あたし、正直っすよね。褒めてもいいんですよ？」

陽奈　「ご褒美に教えてくださいよ。先輩、いつも何をオカズにオナニーしてるんですか？」

陽奈　「……あっ、今目がパソコンを見ましたね？」

陽奈　「そっか、なるほどー。最近の男の人は、ネットでエッチな画像とか見ちゃうんですねぇ」

陽奈　「確かにあたしも漫画とかは全部電書にしてるし、おそろいっすね！」

陽奈　「……どうしたんすか？　うなだれちゃって」

陽奈　「あたしはすごい嬉しいっすよ。先輩って、エッチなこととか、あんまり興味ないイメージでしたから」

陽奈「ちゃーんと、男らしくエロエロなことには興味あるみたいで、安心しました」

陽奈「ん、え……？　今日のご飯、美味しかったっすか？　そんな、お礼を言われるほどのことじゃないっすよ」

陽奈「ふふー……なーんか、露骨に話題を逸らされた気がしますけど、悪い気はしないです」

陽奈「あたしですね、実は男の人相手に料理を作ってあげたのって、これが初めてなんです」

陽奈「その相手が先輩だってのが……ちょっと恥ずかしいけど、うれしいなー、って」

陽奈「せーんぱい。もっと近くで話しましょうよ」

陽奈「はい、ここ。並んで座ってお話しましょー♪」

陽奈「ふふ、なんか柄になく素直っすね。やっぱり、お腹がいっぱいだと、気持ちに余裕が出来ますからね」

陽奈「そーいえば、ちゃんと言えてなかったですけど、受験合格おめでとうございます」

陽奈「受験中は自重してましたけどー、これからは遠慮なくくっついちゃいますからねー♪」

陽奈　「んぅ……せーんぱい、大好きです。むふー、すりすり～……先輩にひっついてると、なんか安心しちゃうっす……」

陽奈　「先輩も、あたしのこと抱きしめてもいいんですよ？　ね、ね、ぎゅってして欲しいっすよ～」

陽奈　「くすっ、やっぱり奥手だなー、先輩は。そっちがしないなら、あたしがもっとしちゃうっすからねぇ」

陽奈　「んっ、ふふっ、うりうり、うり～。好き、好きです、先輩ぃ♪」

陽奈　「えへへ、あたし今日甘えすぎっすかね。やっぱり最近ちゃんと会えてなかったから、寂しかったみたいです」

陽奈　「先輩もこうして受け入れてくれて……あたし、嬉しいっすよ」

陽奈　「ふふー……でもこうして、二人っきりでいるとぉ……ちょっと、意識しちゃいますよね」

陽奈　「あ、ビクンってした。えへへ、やっぱり先輩もちゃんと性欲があるみたいですね～」

陽奈　「ふふ、股間のとこ、膨らんで来てません？　あたしにくっつかれてて、興奮しちゃいました？」

陽奈「えへへ……今日、体育あったっすからね……ちょっと臭うかもですけど……」

陽奈「先輩ってぇ……真面目そうな顔して、そんな匂いに興奮しちゃってたり？」

陽奈「結構変態さんなんですねー。あたしは、自分の体臭で興奮してもらえてるなら、嬉しいっすけど♪」

陽奈「それじゃあ、もっと身体……くっつけて欲しいっすか？」

陽奈「……はい。先輩も、あたしに抱きついていいですよ。えっと……首筋とか、多分……先輩の好きな匂いだと思うから……」

陽奈「はう、んぅ……えへへ、結構がっつきますね～……先輩の変態～♪」

陽奈「あ、でもこれ、すっごい嬉しいですぅ……ん、はう……ん、ん……」

陽奈「あたしは……先輩の恋人だからぁ……あたしの身体で、どれだけエッチになっちゃっても……構わないっすよ……？」

陽奈「それに……もう、ズボンパンパンじゃないっすか……これ、苦しくないっすか？」

陽奈「うふふ……おっきいままだと辛いだろうからぁ……あたしが、シコシコしてあげてもいいっすよ……？」

陽奈「ふふっ、なんか必死な顔の先輩、新鮮で可愛いっす……くふふ～♪」

陽奈「それじゃあ、このまま……くっついたまま、おちんちんシゴいてあげるっすね♪」

●トラック3

陽奈「うわ……まだパンツ履いたままなのに、すっごい大きくなってるの、分かっちゃうっすね……」

陽奈「えへへ～……先輩ったらぁ、まだなーんにもしてないのに、そこまでおちんちん大きくしちゃうんすねぇ」

陽奈「ホントは期待してたんすか？　あたしが家に来てからぁ……触ってもらえるかも、とか」

陽奈「ふふっ、ドン引きっすよ？　普段は真面目な癖に、本当はドスケベさんなんですねぇ」

陽奈「ん、ふ……こうやって、先輩の身体触るだけでぇ……パンツの中で、引いちゃうくらいおちんちんが暴れてますねぇ」

陽奈「これ、おちんちん無視して、他のとこ触ってたらどうなるっすかねぇ……ふふっ」

陽奈「脇腹、とかぁ……んんぅ……」

陽奈「おへその周り、とか……」

陽奈「んふふ、乳首は、どうです……？」

陽奈「んぅっ、きゃん……えへへ、身体、跳ねちゃいましたねぇ」

陽奈「いくら興奮してるって言ってもぉ、乳首でそんな反応するなんて、先輩、変態さんみたいっすよ？」

陽奈「ってか、後輩に向かっておちんちん突き出してる時点で、やらしーことは確定ですけどねぇ、うふふ」

陽奈「……あぁん……先輩の目、めっちゃ切なそうになってるっすねぇ……」

陽奈「ホントはぁ、もっとイジメてあげたいっすけど……うふふ、あんまり焦らしたら、可哀想っすね……」

陽奈「じゃあ、おちんちん……触るっすよ……」

陽奈「えっと、あの……汚れちゃうかも、だから……パンツ、下ろしますね……」

陽奈　「う、わ……えへへぇ……もう、こんなに大きくなっちゃってるんですねぇ……」

陽奈　「あたしが先輩のことイジってたせいで、ここまで大きくなったんすよね？」

陽奈　「ふふっ、なんていうか、カノジョとして誇らしいかな、なーんて……」

陽奈　「じゃあ、『おちんちんシコシコしてください』ってちゃんとお願いしないといけないっすね」

陽奈　「えー？　確かに触るとは言いましたけど、ちゃんとおねだりされないとやる気でないですもーん」

陽奈　「ほら、ほら、おねだりしてくださいよ。あたしの手でシコシコされて、いっぱい気持ちよくなりたいって、言ってみてくださいよ～♪」

陽奈　「はぁ、はぁ……ふぅ、くぅん……えへへ……ほら、早くぅ……おちんちん、苦しいですよね……早く言って、楽になりましょ……はぁ、んぅぅ……」

陽奈　「……あはっ、よく言えました♪　やっぱり、先輩って可愛いっす～～～っ……♪」

陽奈　「それじゃあ、触っちゃいます、ね……あたしの小さなお手々で、先輩のバキバキになったおちんちん、シコシコしちゃいますからねぇ……」

陽奈「んっ、んっ……ふぅ、ん、はぁん……先輩のおちんちん……あたし、触っちゃってるっすぅ……」

陽奈「えへへ……ゴシゴシしてると、先輩の身体、すっごい震えてるっす……あたしのお手々でされるの、そんなにいいんすか？」

陽奈「普段自分の手でするのと比べてどうっすか？　一人で無様にビュービュー射精する時よりも気持ちいいっすか？」

陽奈「ひゃんっ……えへへ、何興奮してるんすかぁ……もしかして先輩、酷いこと言われると余計興奮しちゃう、変態さんだったりしてぇ……」

陽奈「安心してください……先輩がどんな異常な変態さんだとしてもぉ……あたしは、カノジョですからぁ……」

陽奈「軽蔑はしても、ちゃーんと射精するまで、おちんちん握っててあげますからねぇ」

陽奈「……あはっ、まーたおちんちんビクンってした。先輩～、もしかしてマゾだったりするんじゃないですかぁ？」

陽奈「後輩にちんぽ握られて、性癖馬鹿にされてぇ……それでどんどんちんぽ固くするなんて、マゾじゃないとありえないっすからねぇ？」

陽奈「う、わ……おつゆ、出てきましたね……まだ全然弱く握ってるだけなのに……」

陽奈「どんだけ馬鹿にされるのが好きなんですか……これって、先輩が馬鹿なんですか？　おちんちんがお馬鹿さんなんですか？」

陽奈「普段は余裕ぶってる先輩も、くっついてるおちんちんがお馬鹿さんだと苦労しそうですねぇ……」

陽奈「学校でもあんまりあたしに会ってくれないのって、このお馬鹿なおちんちんが勝手におっきくなっちゃうから、とかだったり？　くすっ」

陽奈「今は、だーれも見てませんからね。いくらでも、おちんちん馬鹿になっちゃっていいっすからねぇ」

陽奈「ただ、あたしは先輩の見たことないエロ顔に、ちょ～っと呆れちゃってますけどね～♪」

陽奈「ふふ、どんどんおつゆ増えてますね～。牛さんのお乳搾ってるみたいで、ちょっと楽しいかもっす……」

陽奈「んふふ……しこしこ、ぎゅっぎゅ、しこしこ、ぎゅっぎゅ……」

陽奈「えへへ、あたしの手が汚れるくらい、先っぽのおつゆ、垂れてきちゃってますよ」

陽奈「これって、本当はおまんこの滑りをよくするためのおつゆなんですよねぇ」

陽奈「それを、手の中にいっぱい吐いちゃって、おちんちんがとっても可哀想っすねぇ♪」

陽奈「いいっすよ～、この手をおまんこだと思って、いっぱいおちんちんゴシゴシしましょうね～」

陽奈「あはっ、先輩も腰が浮いてきて……本当にあたしのお手々、おまんこだと勘違いしてるみたいっすね……」

陽奈「くすっ、ふふふっ！　いっつも涼しい顔してる癖にぃ……おちんちんシコシコされたらこんなに必死になっちゃうなんて」

陽奈「せんぱぁい……本当はドスケベでドＭの、変態さんだったんっすねぇ……♪」

陽奈「もー、仕方ないなぁ……必死になってる先輩が可哀想だからぁ……もっと強く、おちんちん握ってあげますね……」

陽奈「んっ、ふっ……はぁ、んっ……んっ、ふぅん……」

陽奈「えへへ……先輩の必死な顔見てたら、あたしもちょっと興奮しちゃってるっす……」

陽奈「あたしの手のひらで、こんなに先輩がエッチになってると思うとぉ……」

陽奈「なんていうか、先輩のこと……支配しちゃったみたい、っていうかぁ……ふふ、ワンちゃんと遊んでるみたいな気持ちです……」

陽奈「ふふっ、息を荒くして、情けない顔をして……ホントにワンちゃんみたい、ですね？」

陽奈「ほんと……シコシコしてるだけで、これだけエッチになるなんて、動物の発情期みたいっすよ？先輩♪」

陽奈「んっ、はぁっ、んんぅ……腰、すごい動いてる……」

陽奈「発情ちんぽ、射精したいっすか？　動物みたいに、見境なく射精しちゃうんすか？」

陽奈「えへへ……いいっすよ……射精、してください……あたしの手の中をぉ……おまんこだと思ってぇ……」

陽奈「気持ちいい射精、いっぱいドピュドピュ～って、しちゃいましょお……」

陽奈「んっ、うぅんっ……あっ、はっ……えへへ、かわいっ……はっ、んっ……はぁ、はぁ……ふぅ、先輩ぃ……」

陽奈「ほら、おちんちん潰れちゃうくらい、強く握っちゃってますよ……それでも、気持ちよさそうですけど……♪」

陽奈「えへっ、えへへぇ……手の中で、脈打ってるっす……もう出ちゃうんですよね？」

陽奈「あたしの手で、シコシコ、ギュ～ってされて、もう限界なんですよねっ……！」

陽奈「ほらっ、イッちゃえっ、見ててあげるっすからっ……情けない射精顔、見てるっすから、イッちゃってくださいっ……♪」

陽奈「んふっ、んっ、はっ、あっ……んんぅっ、はぁっ、はぁ……イケっ、ほらぁっ……いっちゃえぇ……イッちゃえっ、んっ、んああっ……！」

陽奈「きゃんっ、あはっ……出てるっ……くすくすっ……先輩の身体も、おちんちんも……すっごい跳ねてるっす……あははっ……♪」

陽奈「ほら、まだ止めないっすよ？　一滴も出なくなるまでぇ……ぎゅーってしてあげるっすからねっ……ふふふっ！」

陽奈「えい、えい、ぎゅ～～～。えへへ、先輩、苦しそうな顔になってるっす……でも、せーえきは止まってないっすよ？」

陽奈　「んふ……えへへ、ぎゅっ、ぎゅう……んふふ……流石に、勢い弱くなってきた……」

陽奈　「もう、出ないっすか？　ふふー、仕方ないっすねぇ。じゃあ、シコシコは止めてあげるっすよ」

陽奈　「う、わ……見てくださいよ、先輩。くっさいおつゆが、あたしの制服まで飛んじゃってますよ……」

陽奈　「あーあ……ほら、ここ見てくださいよ。じわ～、ってせーえきがシミになっちゃってます」

陽奈　「もぉ……先輩ったら、本当におちんちんのことしか考えられないワンちゃんなんすかぁ？」

陽奈　「ったくぅ……拭くものもないし……れる、ん、じゅずず……お口で綺麗にするしか、ないじゃないですか、もう……れるる、じゅる、じゅる……」

陽奈　「ん……こくん……えへへ、くっさぁいです。先輩のせーえき、生臭くて、ベロがどうにかなっちゃいそうっすよぉ……」

陽奈　「まったく、もう……いくら舐めても、全然取れない……じゅるる、れる、ちゅ……ごく、ごく……」

陽奈　「むうー……制服も、だけど……太腿とかも結構汚れちゃったなぁ……」

陽奈　「ね、先輩。お風呂入らないっすか？　先輩も、おちんちんとかパンツどろっどろになってるし」

陽奈　「このままじゃ気持ち悪いっすから……流して気持ちよくなりましょうよ」

陽奈　「え？　もちろん一緒に入るんすよ。先輩が汚くしたんですから、ちゃんとあたしの身体、綺麗にしてくださいよね？」

陽奈　「んー、続きですかぁ？　えへへ……それは、先輩の態度次第、っすかねぇ？」

陽奈　「ってか、一回出したのにそんなこと聞くなんて、やっぱ先輩、動物みたいな性欲っすねぇ」

陽奈　「あたしは、あたしで興奮してくれてるの、そんな嫌じゃないっすけどね♪」

陽奈　「ふふ、それじゃあ、お風呂……行きましょうか？」

●トラック４

陽奈　「ふいー、いいお風呂ですねぇ」

陽奈　「洗いっこ、楽しかったっすね、先輩♪」

陽奈「……むぅ、少しは反応してくださいよ。それとも、一緒に湯船に入ってると緊張しちゃうんすか？」

陽奈「さっきあんなに情けないイキ顔見せたんだから、今更恥ずかしがることなんて何もないっすよ♪」

陽奈「それにぃ……あたしの背中に、おちんちんがツン、ツン、って当たってるし。興奮してるのバレバレっすよ、くすくす」

陽奈「でも、すごいっすねぇ。さっきあたしの服をビショビショにするくらいいっぱい出したのに、もう硬いだなんて」

陽奈「ふふー、あたしの身体洗ってる時から、もうカチカチでしたよね」

陽奈「隠そうとしても無駄っすよー、あたしの胸、見てましたもんね♪」

陽奈「……触ってもいいんですよ。この格好のまま、後ろから……」

陽奈「……うんうん、素直でよろしいっす。えへへ、どぞ、触ってください」

陽奈「ん、きゃう……は、あん……触り方、やらしーっす……ふふ、そんなにがっつかなくても、おっぱいは逃げないっすよぉ」

陽奈「あはは、なんだかんだ言って……強がってるけど、あたしに流されっぱなしっすね、先輩」

陽奈「ふふっ。否定しても、おっぱい触りながら言うと、ぜーんぜん説得力ないっすよ♪」

陽奈「くぅ、ん……はう……おっぱい、気持ちいいっす……ちょっと痛いけど、なんか、すっごい求められてる感じがしてぇ……」

陽奈「えへへ、背中に当たってるおちんちんも、すっごいおっきくなってるの分かるっすよ」

陽奈「ん、はぁ……このまま、背中でズリズリして出しちゃうの……んぅ……もったいない、っすよねぇ？」

陽奈「先輩さえよければぁ……お・く・ち、でぇ……おちんちんしゃぶってあげても、いいっすよ？」

陽奈「ほらほら～、意地なんて張ることないですよぉ」

陽奈「あたしは先輩のカノジョなんですからぁ。フェラチオくらいぃ、恋人同士だったらみんなしてますってばぁ……」

陽奈「ね、ね、絶対気持ちいいですよ。あたしの唇とベロでぇ、おちんちん舐めてあげるの……」

陽奈「さっき手でしたのより、ずっと柔らかいですよ……？」

陽奈「んぅ……ちゅっ……れる、れる……ちゅ、れむぅ……」

陽奈「くす、えへへ……どうです？　柔らかいでしょ？　これでおちんちん舐められたら、って考えてみてくださいよぉ」

陽奈「それだけで、もうすごい……興奮しちゃいますよね？」

陽奈「……うんうん、素直が一番ですよ♪　それじゃあ……バスタブに、腰掛けてくださいっす」

陽奈「……ふふっ、これだとちょうど……おっきくなったおちんちんが、あたしの目の前に来てますねぇ」

陽奈「すん、すん……はぁ、ん……すぅぅ……んぅっ……」

陽奈「えへへ、石鹸の匂いと、やらしーおちんちんの匂いが混ざって、とってもいい香りっす♪」

陽奈「ん、先っぽ、まだ隠れてますねぇ。先輩のおちんちんは恥ずかしがり屋さんっすね」

陽奈　「じゃあ……こーいうのはどう、っすか……あむ、ん……」

陽奈　「んむ、んっ、んっ……れるぅぅ……んぱっ……」

陽奈　「えへへー、お口で皮、向いちゃいましたぁ……♪」

陽奈　「きゃんっ……お顔出した途端、ぶるぶる～、って震えてるっすねっ」

陽奈　「さっきの、そんなによかったっすか？　なら、もっと皮イジってあげますねぇ……えへへ」

陽奈　「んむ、れるっ……ちゅっ、ちゅっ……はぁ、んむ……んちゅっ、ちゅっ、んれるぅ……」

陽奈　「ふふー……まだまだ始まったばかりなのにぃ……おつゆ、もう垂れて来てるっすよぉ……」

陽奈　「堪え性のない先輩♪　まだかるーくやってるだけなのに、もっと強くしたら、どうなっちゃうんでしょうねぇ……うふふ」

陽奈　「んぅ……おつゆ、垂れてますねぇ……れる、んっ、ちゅううう、んちゅうっ……」

陽奈　「ふふっ、これ……気持ちいい、ですかぁ……んじゃ、もっとするっす……はぁ、れる、れる……んぅぅ、れろ、んちゅっ……」

陽奈「ここ、敏感なんすねぇ……割れ目舐めると、身体ビクビク～、ってさせちゃって、可愛いっすよ♪」

陽奈「他のとこ？　やです～。先輩の無様なとこ見たいから、もっともーっと割れ目舐めちゃうっすからねぇ♪」

陽奈「ん、れる、あむ、んぅぅ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……んふふ……れろれろ、んぅぅ……ちゅっ、れるぅ……」

陽奈「えへへぇ、そんな切なそうな顔で、見ないでくださいよぉ……れる、れる……ちゅっ、あむぅぅ……」

陽奈「ぷぁっ……はぁ、んふぅ……」

陽奈「えへへ、先輩のおちんちん、いっぱいペロペロしちゃったっす」

陽奈「あたし、この味好きだなぁ……先輩の身体の中で、一番濃厚な臭いがするから……」

陽奈「ふふ、おしっことか、おつゆの臭いがベロにこびりついちゃってぇ……頭、フラフラしちゃうっすよぉ……」

陽奈「はぁ、んぅぅ……えへへ、せんぱぁい……さっきから、切なそうにあたしのこと見つめちゃってますねぇ？」

陽奈「先っぽばっかりペロペロされるの、嫌っすか？もっと竿の方までイジって欲しい？」

陽奈「えー、嫌っすよぉ。こんな大きいのを咥えたら、あたし息出来なくなっちゃいそうだしぃ」

陽奈「先輩は、あたしの苦しんでる姿見て、コーフンしちゃうんですか？」

陽奈「だとしたら、ほんとーに酷い恋人さんっすね……」

陽奈「ぷっ、くすっ。冗談、冗談っすよ。もー、先輩はいちいち大袈裟だなぁ」

陽奈「苦しいのは確かですけどぉ……大好きな先輩のおちんちんなんですよ？」

陽奈「無理してでもお口で味わいたいしぃ……気持ちよくさせてあげたいっすよぉ……」

陽奈「だからぁ……」

陽奈「あむっ、じゅぽっ……んく、んれる……じゅう、れじゅるっ……！」

陽奈　「んふふっ、咥え、ちゃったぁ……んじゅるっ、じゅるっ……んじゅっ、ちゅっ、ちゅううう……」

陽奈　「ほらぁ、見てください……先輩のビキビキになったおちんちんがぁ……はぁん……」

陽奈　「あたしの口の中……ずっぽり入っちゃってる、っすよぉ……♪　んむ、んぅぅ……」

陽奈　「えへへぇ……なんかこれぇ……先輩のおちんちん、食べちゃってるみたいっす、ね……はぁ、んっ、んむ、んちゅる……」

陽奈　「んむっ、れるっ、れじゅるっ……ちゅっ、んむ……ぷあ、はぁ……んぅぅ、ちゅっ、んっ、んっ……ぢゅるる、ちゅううう……」

陽奈　「はぁぁ……んっ、ちゅっ……れるぅ、んちゅっ……ちゅっ、じゅっ……じゅむ、ん……ちゅっ、ちゅ……」

陽奈　「ぷぁぁっ……ぷはぁっ……んんぅ……くぅ……はぁ、はぁ……ふぅ、ううん……」

陽奈　「えへへ……おちんちん咥えるの、あたし結構好きかもっす……先輩のこと、口で犯してるみたいでしたよね、今の……」

陽奈「ふふ、乱暴におちんちん咥えられて、感じちゃったっすか？　ホント先輩ったら……ヘンタイ……♪」

陽奈「こんなドエロの先輩とぉ……イジメられて喜ぶおちんちんのこと、気持ちよくさせてあげられるのなんて……」

陽奈「あたしくらいしか、いないんですからぁ……ちょっとは、感謝しながら感じてくださいよねー？」

陽奈「……くす、とか言いながら……あたしも、おちんちん舐めるの……結構好きっすけど、ね♪」

陽奈「ん、じゃあ続きするっす。あんまり焦らしすぎると、おちんちん可哀想だし……」

陽奈「あたしも、もういっぱい舐めたくて、我慢の限界っすからぁ……♪」

陽奈「んじゅっ、ちゅっ……じゅるるっ、ちゅうっ……んむっ、んっ、ちゅうううっ、ちゅっ、ちゅっ……！」

陽奈「はぁ、んむ……れるっ、ちゅっ……んっ、んっ……れるぅぅぅっ……じゅるるっ、んじゅうっ……」

陽奈　「んんぅっ……あむっ、れるっ、んちゅる……れる……んはぁ、はっ、はぁぁ……」

陽奈　「ぷぁぁっ……はぁ、んふ、えへへ……」

陽奈　「先輩、すっごくだらしない顔になっちゃってるっすよぉ？　おちんちん好き勝手にしゃぶられて、情けない顔晒しちゃってますよ～？」

陽奈　「その顔、好き、です……じーっと顔、見つめながらぁ……もっとおちんちんペロペロしちゃいますね……んちゅう……」

陽奈　「れる、っちゅ……ふふっ、顔、真っ赤になってますよぉ……感じてるところ見られながら舐められるの、恥ずかしいっすねぇ……？」

陽奈　「ちゅっ、ちゅっ……んんぅ、あむぅ……くすっ、女の子みたいに顔逸らしちゃって……」

陽奈　「先輩、情けなくて……とってもエッチっすよぉ……？　もっともっと、イジメてあげたくなっちゃうっすぅ……」

陽奈　「あむ、れる……んちゅ、ちゅうう……はっ、んむ……れるるっ、んちゅっ、じゅっ、ちゅううう……」

陽奈「ほらぁ……エッチな顔、隠す余裕がなくなるくらい、強く舐めてあげます、からぁ……んじゅるっ、じゅるるっ……」

陽奈「もっともっと、だらしな～いトロ顔……あたしに見せてくださいねぇ……んちゅる、ちゅっ、ぢゅっ、んじゅるぅ……」

陽奈「んふふ……我慢してるから、ですかね……身体がビクビク震えて来ましたよ～？」

陽奈「エッチな場所舐められて、身体ブルブル震わせちゃってぇ……くすっ、可愛くて、えっちでぇ……」

陽奈「もぉ……あたしまで、すっごい興奮してきちゃう、っすよぉ……えへへ……んちゅるっ、じゅっ……んちゅう、ちゅ、ちゅっ……」

陽奈「ううう、先輩より先に、あたしの方が、我慢出来なくなっちゃった、かもぉ……んふっ、ん、ちゅう、んちゅう……」

陽奈「おちんちん、思いっきり舐めたくて、仕方なく……なっちゃいますぅ……」

陽奈「はぁ、はぁ……んちゅっ、んっ、あむ、んっ、れちゅる、じゅぅ、んちゅう……」

陽奈「あ、あたしい……ちょっと、抑え効かなくなってきちゃいました、からぁ……」

陽奈「先輩も、我慢……しないでぇ……いっぱいエッチな顔、見せて下さい、ねっ……んぅぅ、んちゅうう……！」

陽奈「身体も、ビクンビクンさせちゃって、いいですからぁ……」

陽奈「あたしのフェラ、でぇ……感じてる姿……全部見せて、くださいねっ……んぅぅっ、んちゅっ、ちゅうぅぅっ……！」

陽奈「れるっ、じゅちゅっ……あぁん、むっ……れるぅ、れるぅ……んちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……」

陽奈「んじゅちゅっ、じゅっ、ちゅぶぅ……えへへ、せんぱぁい……すっごい、エロい顔してるぅ……」

陽奈「おちんちんも、パンパンになっちゃってぇ……もう、我慢の限界って感じ……ですか？」

陽奈「出したい？　出したい？　唇でおちんちん絞られて、びゅーびゅーしちゃいたいっすか……？」

陽奈「えへへ、必死に頷いちゃってぇ……もぉ、可愛すぎ、ですってばぁ……あむ、んぅ……」

陽奈「しょうがない、なぁ……特別、ですからね……」

陽奈「このままぁ……じゅーじゅー吸って、あげますからぁ……好きな時に……吐き出しちゃって、いいっす、よぉ……あーん、んむ……」

陽奈「んじゅーっ……じゅるるっ、じゅるっ、じゅっ、ちゅううっ、んちゅっ、んんぅっ……ふぅ、はぁぁぁ、んむ、れるぅぅ……！」

陽奈「れるぅっ、んむっ、ちゅっ、れるるっ、んむぅっ……！　はっ、はっ……んちゅううう……れるるっ、れるぅっ！」

陽奈「くぁっ、はっ……出そう？　出そうっすか……？　いいですよ、出して、出してくださいっ、このまま……んぅ……ちゅううっ……！」

陽奈「んじゅるるるっ！　じゅうううううっ！　ちゅぶぶっ、んちゅっ！　ちゅうううううっ、ぢゅっ、ちゅうううううっ！」

陽奈「んきゅっ！？　んうううううっ！　んぶっ、んんっ！　んんんっ、ん～～～～っ！」

陽奈「すごっ……うひぃ……んっ、んっ……口の中っ、どくどく、って……んぅ、くぅぅんっ……！」

陽奈　「んふ～……もっと、出してもいいんす、よぉ……んじゅぷ……ちゅうううう～～～っ、んちゅ～～～～っ」

陽奈　「はふっ、んっ、ごく、こく、こく、こく……んんっ……ロっ、あふれるぅ……んん……じゅるる、ごく、ごくんっ……」

陽奈　「れるっ、ちゅぶぶ……ごくごく……じゅるる……じゅぶっ……こく、ごくっ……んぅ、ぷぁぁ、はぁ、はぁ……」

陽奈　「っぷぁっ……はぁっ、はぁっ……ふぅぅ……ん、くぅ……はぁ、はぁ……」

陽奈　「え、えへへ……相変わらず、すっごい濃い精液、ですねぇ……」

陽奈　「もぉ……飲みきれなくて、窒息するかと思いましたよぉ……」

陽奈　「もしかして、仕返しっすかぁ？　あたしがイジメたから、精液で溺れさせてやろー、とか……あはは」

陽奈　「ってのは、冗談として。ふふー……」

陽奈　「イク時の先輩の顔、ちょーエロかったっすよ♪」

陽奈　「不覚にも、あたしもキュン、ってしちゃいましたもん」

陽奈　「もちろん、おまんこがキュン、ってしたんですよ……えへへ……先輩、まーた興奮しちゃいましたね？」

陽奈　「あたしの口から、『おまんこ』って出た瞬間にぃ……まーた身体が跳ねたっすよぉ？」

陽奈　「口でしたばっかりなのに、もうおまんこに入れたくなっちゃってるんですか？」

陽奈　「ヘンタイさん……♪　ふふっ、そうだなぁ……どうしよう、かな……」

●トラック5

陽奈　「ねーねー、先輩。そんなにおまんこ、に挿れたいっすか？」

陽奈　「もう元気になっちゃったおちんちん、おまんこにズボズボしてぇ……いっぱいいっぱい、射精したくなっちゃってますかぁ？」

陽奈　「恥ずかしがらなくても、いいっすよ？　だって、気持ちいいですもんねぇ、おまんこ、おまんこの中に、挿れちゃうのぉ……」

陽奈　「……ふふっ、でもぉ……先輩も、お疲れですよねぇ。あれだけいっぱい射精しちゃったっすから、ねぇ」

陽奈　「分かりましたぁ。それじゃあもう一回身体を流して、お風呂上がりましょうかね」

陽奈　「ふぃ～、ちょっとのぼせちゃったかなぁ、暑い暑い」

陽奈　「……何見てるんですか？　んー？　あたしの顔？　おっぱい？」

陽奈　「それともぉ……ここの割れ目ぇ……おまんこのこと、じーっと見ちゃってますぅ？」

陽奈　「ふふっ、ほーんと先輩って……やらしーことで頭がいっぱいのヘンタイの癖して、素直じゃないっすよねぇ」

陽奈　「いい、ですよ……もっと先輩のこと、気持ちよくしてあげても……♪」

陽奈　「だからぁ、ちゃんと言って欲しいっす……『もっとおちんちん気持ちよくして欲しいです』ってぇ、おねだりしてくださいよぉ♪」

陽奈　「ふふっ、ちゃんと言えたっすね。分かりました、じゃあ～……」

陽奈「そこのバスタブに、背中を預けてくださいっす」

陽奈「ふふ、そうそう。そこ、いい位置っすね。んじゃあ……」

陽奈「今度は足で、おちんちん踏んであげますね～♪」

陽奈「ほら、ぐい、ぐい～♪　うーん、手でシコシコするのもよかったけど、足でするのも面白そうっすねぇ」

陽奈「え、話と違うって言われてもぉ、別にあたしは、おまんこで気持ちよくしてあげるだなんて、一言も言ってないっすよぉ、ふふっ」

陽奈「それに、足で踏まれてるのに、ちょっとずつ大きくなってきちゃってるじゃないですか」

陽奈「やっぱ、先輩はイジメられるの大好きなヘンタイさんですもんねぇ、これ好きだと思ったんすよ～♪」

陽奈「ふふっ、やめて欲しいなら、今すぐおちんちんを小さくしてみてくださ～い」

陽奈「ほら、床で潰すようにぎゅーって踏んでるのに、跳ね返すみたいにしてぇ……どんどん大きくなってくるっすよ～」

陽奈　「あはっ、これ、面白いなぁ。ぷにぷに柔らかいおちんちんを、つま先でイジってるの、なんか楽しいっす」

陽奈　「うわっ、カリんとこ、踏み心地がいいっすよ？　んふー、ここを指で、ぷにぷにー、って……」

陽奈　「んふふー、どうしたんすか？　小さくなるどころか、どんどんおっきくなってきてますねぇ？」

陽奈　「カノジョにおちんちんをおもちゃみたいに使われて、興奮しちゃってるんすかぁ？」

陽奈　「うっわ、ヘンタイだー。ちょっと引いちゃいますよ、先輩♪」

陽奈　「うふふ、うそうそ。あたしも先輩をイジメて悦ぶ変態さんだから、おあいこですねー」

陽奈　「でも、イジメてるだけじゃお互いに気持ちよくなれませんからねぇ、うーんと……」

陽奈　「これ、どうですか……両足で、おちんちん挟んじゃうの……」

陽奈　「ふふー、これだと、先輩からはっきりおまんこも見えちゃってますしー」

陽奈　「あたしも、先輩をイジメてる感じ強くて、面白いですしー」

陽奈　「なんだか、楽しくなってきたっすよね、くすっ」

陽奈　「はい、じゃあこのまま……足の裏で、おちんちんシコシコしちゃうっすねぇ♪」

陽奈　「ほら、シコシコ、シコシコ……うふふ、自分からこんなことしておいてなんですけどね」

陽奈　「あたしたち、とんだヘンタイカップルですよねぇ、足の裏で、エッチしちゃうだなんて」

陽奈　「これ、どっちのせいですかねぇ。あたしがエッチすぎるのか、先輩がエッチすぎるのか……うーん、謎っす」

陽奈　「でもぉ……先輩がどれだけ変態さんになっても、あたしは付き合ってあげるっすから」

陽奈　「安心して、どんどんエッチになっちゃってくださいね♪」

陽奈　「んー、軽く挟んでるだけだと、物足りなさそうっすね？」

陽奈　「そんじゃあ～……どんどん強く、挟んでいくっすよ～」

陽奈　「この格好で……締め付けていってぇ……ぎゅーって強くしちゃいますからねぇ……」

陽奈「強く挟んだままぁ……足裏でしこ、しこ……うふふ、気持ちいいっすか？」

陽奈「あたし、この格好だとぉ……すっごい馬鹿みたいな体勢になっててぇ……」

陽奈「先輩を責めるつもりだったのに、すっごい恥ずかしくて……うう、これは誤算だったっすぅ……」

陽奈「ガニ股開いちゃって……その格好でおちんちん挟んでるとか、やばくないっすか……ホントにヘンタイっぽいっす……」

陽奈「う、あうー……あ、あんま見ないでくださいっす……そんな目で見られたら、ホントに恥ずかしいっすからぁ……」

陽奈「むー……さっきまでのお返し、されちゃってる……くーっ、ドMの先輩の癖にぃ……」

陽奈「こうなったら……早く射精させて、これ、終わりにしちゃうっすからねっ……！」

陽奈「はぁっ、んっ、くぅ、んっ……ふぅ、はぁんっ……ほら、強くして、あげますから……イッちゃって、いいですからねっ……！」

陽奈「ほらほらぁっ……我慢なんて、しなくていーんですよぉっ……カノジョの足でぇ……ぎゅー、ってされて、イッちゃえっ♪」

陽奈　「ほらっ、イッちゃえっ、イッちゃえぇっ♪　足で踏みつけられてっ、イッちゃえぇっ♪」

陽奈　「きゃんっ、はぁんっ♪　出てるっ、ああんっ……せーしっ、びゅっびゅしてるぅっ……あはぁんっ、あんっ、くぅんっ♪」

陽奈　「うあっ、ああんっ……どびゅどびゅー、って溢れちゃってるの……よーく見えちゃいますよ、せんぱいぃ……」

陽奈　「はぁっ、ふああ……くすっ、えへへ……足でされちゃったのに、こんなに……たくさん……」

陽奈　「ほんとーに、見境ないっすね……ふふっ。おちんちん刺激してくれるなら、身体のどこでも射精しちゃうんですねぇ」

陽奈　「でも、嫌いじゃないっすよ……えへへ……あたしにされるから、こんなに興奮してくれるんですよね」

陽奈　「……そこは恥ずかしがらないで肯定してくださいよ～！　あーもう、言ったあたしが恥ずかしくなってきちゃったっすよ……」

陽奈　「ふーん、そんな態度取るんですね。次はちゃんとやらせてあげようと思ったのに」

陽奈　「何をって、本番ですよ。ほ・ん・ば・ん……♪」

陽奈　「えへへ、したいですよね……実は、あたしもしたくて……限界かも、です……」

陽奈　「でもその前に、ちゃんと聞きたいですよ、先輩の口から、そのぉ……」

陽奈　「あ、あたしのことが、好き、ってぇ……」

陽奈　「……う、あうう……う～～～っ……」

陽奈　「自分でおねだりしておいてなんですけどぉ……あらためて言われると、すっごい恥ずかしいっす……」

陽奈　「えと、あの……そのぉ……あたしも、好きですよ……先輩の、こと……」

陽奈　「好きだから、こうしてイジワルもいっぱいしちゃうし……」

陽奈　「エッチなことも、したいって思っちゃうんです……」

陽奈　「う、うー！　とにかく、エッチしたいっす！　しちゃいますねっ！」

陽奈　「せ、先輩はそのまま、座った格好でいいですからっ！　え、えっと……じっとしててください ねっ！」

●トラック6

陽奈「あう、えっと……こうやって、向かい合うと……えへへ……ちょっと、照れちゃいますね……」

陽奈「あー……えっと、その……先輩……キ、キスぅ……しても、いいっすかね……」

陽奈「あ、あたしだって一応、女の子ですから、その……カレシとキスするの、結構好きだったり、しますし……」

陽奈「あ、いや……先輩が、やならいいんですよ？　あたし、イジワルばっかりしてて、お願いまで聞いてもらうの、ズルいですし……」

陽奈「はむっ！？　んっ……ちゅっ……せんぱっ……急に……はぁ、ああんっ……ちゅっ、んむぅ……」

陽奈「んむっ……はっ……くっ、ふぅん……」

陽奈「もー、先輩ってば……普段は情けない癖にぃ……急にする、だなんて……反則っすよぉ……」

陽奈「えっへへぇ、じゃあ、もっともっと、して下さい……チュー、いっぱいしたいっす……」

陽奈「んぅ……あむっ……ちゅっ、んちゅっ……んふぅ……んっ、んっ……ちゅうう、んじゅるっ……」

陽奈「ぷはぁっ……えへ、えへへ……もう、本当に先輩、ズルいです……」

陽奈「こんなにキス、されたら……あたし、どんどんエッチな気持ちになっちゃいますってぇ……」

陽奈「もー、悔しいなぁ。おちんちん、早く欲しくて、仕方なくなっちゃってるっすよぉ……」

陽奈「うふふ、先輩のおちんちんも、もう準備万端、って感じっすね♪」

陽奈「それじゃあ、挿れちゃうっすからね……先輩のおちんちん、勃起ちんぽぉ……あたしの中に、挿れちゃいますからねぇ……」

陽奈「ん、くぅ……はぁ、んっ……ふぅ、ふぅ……んあっ、あっ……入って、来てる……先輩の……来てるっす……はぁぁ、ああんっ……」

陽奈「えへへぇ……先輩、見てくださいよぉ……あたしのおまんこの中に、ずぶずぶ～、って先輩のが、入っていくとこぉ……」

陽奈「自分でも、不思議っす……こんなに大きいのが、あたしの中に入ってるのにぃ……」

陽奈「苦しい、どころか……繋がってるとこ、ポカポカしてきてぇ……はぁぁ……すっごい、気持ちいいんですよぉ……」

陽奈「にひひ、でも、すぐに全部は挿れてあげないですからね。おまんこ全部で、先輩のこと味わいたいからぁ……」

陽奈「まずは、入り口でぇ……ほら、にゅぷ、にゅぷって……ゆっくり、動きますからねぇ……」

陽奈「んふふぅ……先輩のが引っかかって、めくれちゃいそう……ピンクのヒダヒダが、顔出しちゃってますぅ……」

陽奈「先輩は、どうですか？　入り口の、柔らかいところでぇ……おちんちん刺激されるの、気持ちいいっすかぁ……？」

陽奈「ちょっと、物足りない？　くすっ、ワガママですねぇ」

陽奈「もっとおまんこの深いとこに突っ込んでぇ……じゅぷじゅぷ、ずぼずぼ、ってしたいんですねぇ……えっち♪」

陽奈「仕方ないですねぇ……それじゃあ、少しずーつ、深くしていってあげますからね……」

陽奈「んっ、んっ……ふふ、どんどん入っていっちゃいますねぇ」

陽奈「先輩の、おっきすぎますからぁ……挿れるのだけでも……くぅんっ……おまんこ、刺激してくるっす……」

陽奈「あたしは苦しんでるのに、先輩は早くおちんちんズボズボしたい～、って顔してますね……くすっ、やらしーなぁ……」

陽奈「もー、そんなケダモノみたいな先輩のこと、受け入れてくれる女の子なんて、あたしくらいしかいないんっすからね……」

陽奈「ちょっとは感謝しながら、気持ちよくなってくださいね……♪」

陽奈「……それに、あたしだって先輩に求められるの嫌いじゃない……てか、好き……だし……」

陽奈「うーっ、なんでもないっす！　もうっ、そんな目で見ないでくださいよ～！」

陽奈「ふーんだ、じゃあ分かりました～、先輩が許してくれって言うまで、気持ちよくしてあげちゃいますもんね～」

陽奈「んっ、くっ……ふぅ、あううんっ……はっ、はっ……んぅっ、くぅんっ……！」

陽奈「ほら、ほら……お望み、通りぃ……おちんちん、奥まで飲み込んじゃいましたよぉ……」

陽奈「んんぅっ……！　先輩、気持ちいいとやっぱ、情けない顔になるっすねっ……んっ、あっ、はぁっ、はぁっ……」

陽奈「あたし、その顔大好き、だからっ……もっともっと、見たいっす……えへへっ、激しくなるの、止まんないっすっ……」

陽奈「ふふーん、あれだけ余裕ぶってたのにっ……ちょーっとズボズボされたら、もうそんな感じちゃって……」

陽奈「えへへ、先輩が言ったんだから、容赦しませんよ～？」

陽奈「あたしも、おまんこが壊れちゃう、くらいにいっ……いっぱい、ズボズボしちゃうんですからっ、ねっ……んぅぅっ……！」

陽奈「ひあっ、はっ……くぅっ、くぅんっ……てか、気持ちよくて、止まらないしっ……はぁぁっ、んあっ、んはぁっ……」

陽奈「先輩も、もうすっごい気持ちよくなっちゃってるみたいっすねぇ……」

陽奈「ふふー、どうです？　あたしのおまんこの中で、いっぱい気持ちよくなってくれてます？」

陽奈「はぁ、んぅ……あたし、先輩の悦んでるとこ見るの、すっごい好きなんすよ……だからぁ、もっとっもっと、動いてあげますからねっ……」

陽奈「きゃうっ、んっ……くふぅっ……んあっ……ひあっ、はぁんっ……！」

陽奈「くすっ、気持ちいいっすよね、おちんちん気持ちいいですよねっ……！」

陽奈「先輩は、何も考えなくていいんですよ……いっぱい感じて、いっぱいエッチな顔……あたしに見せてくれれば、それでいいんですからね……」

陽奈「ほらぁ……おまんこ、ぎゅっぎゅ、ぎゅっぎゅ、って締まって、おちんちん擦れるの、分かりますよね……」

陽奈「おまんこの壁、ずりずりされるとっ……あたし、びくびくしちゃって……あはぁ……」

陽奈「気持ちいいの、どんどん大きくなって来ちゃってます……」

陽奈「先輩のエッチな姿見ながら……おまんこ感じるのすごいいいですぅ……あはっ、これすごい、すごい好きっすぅ……」

陽奈「えへへ……これ、ほんと止まんない……止まんなくなっちゃいますっ……」

陽奈「大好きな先輩ちんぽ、気持ちよすぎて、もうっ……余裕とか、全部なくなっちゃいそうっすよぉ……」

陽奈「もっともっと先輩のやらしー顔、見てたいのに……あたしも、やらしい気持ち止まんなくてぇ……」

陽奈「はっ、はっ……もう……ほんとズルいですっ……」

陽奈「あたしのこと、こんなに気持ちよくさせるだなんてぇ……おちんちん、ズルいっす……感じるの、止まんないっ……」

陽奈「もっともっと……動いても、いいですよね……！　先輩も気持ちいいですもんねっ……いっぱい動いてもっ、いいですよねっ……！」

陽奈「はぁっ、んはぁっ……！　んあっ、あっ、あっ……くううっ、んやっ、ひうううんっ！」

陽奈「えへへ、お互いに、もーすっごいエッチになっちゃってますね……」

陽奈「いつもは、あたしばっかり先輩のことイジメてるからぁ……ちょっと、恥ずかしい……ですけどぉ……」

陽奈「今は、いっぱい見て欲しい、です……あたしの感じてるとこ……えっちになってるとこぉ……」

陽奈「あううっ……止まらないっ、腰、止まらないよぉ……先輩っ、はぁっ、くああんっ……！」

陽奈「んくっ、あっ……もう、無理……身体っ……力、入らないっす……くぅぅんっ……」

陽奈「ふうっ、ふううっ……せんぱっ……ごめんなさっ……こーして、掴まってないとぉ……あたし、溶けちゃいそうっす……！」

陽奈「ぎゅーってしちゃって、ごめんなさいっ……もう、力入んなくてぇ……切なくてっ……はぁぁっ……」

陽奈「ぎゅってしてないと……熱くてっ、気持ちよすぎてっ……変になっちゃいそうなんですぅ……」

陽奈「ふふっ……先輩、ぎゅー……ぎゅー……大好き、大好きっす……先輩……あううっ……」

陽奈「やっばいです、このカッコ……おちんちん、深くまで来てて……えへぇ……」

陽奈「あたし、ほんとにおかしくなっちゃいそうっすよぉ……」

陽奈「先輩のおちんちんで、意識飛んじゃいそう……」

陽奈「あっ、止めないで、大丈夫っすから……飛ばしちゃってください……壊しちゃうくらい、おまんこ突いていいっすからぁっ……」

陽奈「ううう、あたし、何言っちゃってるんだろ……ほんと、エロいことしかもー考えられないっ……」

陽奈「ちゃんと責任取って、おかしくなった身体、なんとかしてくださいっ……くううっ、んふううう……」

陽奈「おちんちん、深いところズボズボして……エッチな気持ち、なんとかしてくださいねっ……もっと、もっとしてくださいっ……！」

陽奈「くふぅんっ！　んあっ、あっ、はぁんっ……！せんぱっ……あああっ、好きっ、好きですぅっ……！」

陽奈「も、だめっ……もっと、きもちいくなりたいのにっ、はああっ……もう、来ちゃうっ、我慢、出来ないっす、これっ、ああっ、くあああっ！」

陽奈「イッちゃうっ、イクっ、イッちゃいますぅっ！んうううっ！　おまんこイッちゃうっ、イキますっ、先輩っ、先輩ぃぃっ！」

陽奈「ひぐううっ、あっ、はっ、はぁぁっ、んいっ、くうっ、んぅ、あああっ、イッちゃうっ、だめ、くる、きちゃうっ、あああっ！」

陽奈　「いっ、あっ……はあああああんっ！」

陽奈　「イクっ、あっ！　イクうううううううっ！」

陽奈　「んひっ、ふあっ、ひぐっ、くううううっ、イクイクイクっ！　きゃうううっ、くひいいいんっ！」

陽奈　「う、あっ、はあああ……中っ、出てっ、出てりゅうっ……！　奥、当たってましゅっ、ひああんっ、くひぃ、ひぃんっ……！」

陽奈　「へあっ、あ……ひうう……くぅん……！　びゅー、びゅー、ってぇ……おまんこの奥ぅ……注がれてるっすぅ……」

陽奈　「身体、もぉ、限界なのにぃ……そんなに、されたらぁ……収まらないじゃ、ないっすかぁ……」

陽奈　「んあっ、ああ、あうううう……イッてるおまんこに、出すの、ヤバいですってぇ……」

陽奈　「ふーっ……ふーっ……んい、くううう……イクの止まらなく、なっちゃう……おまんこ、壊れちゃうっすよぉ……」

陽奈　「もぉ……この変態ちんぽぉ……あたしイジメるのが、好きなんですかぁっ……んあっ……も、ホントに、ダメです、ってぇ……」

陽奈　「うああ……はっ、はっ……やっと、止まりました、か……うくううう……」

陽奈　「は、あ……もぉ、ホント……止めないでって言いました、けどぉ……本当に容赦なさすぎ、ですってば……」

陽奈　「先輩はもう……性欲のオバケか、何かなんですかぁ……人がイッてるのに、ずーっと中出し続けるとか……もう、信じられないっすよぉ……」

陽奈　「そ、そりゃあ……すっごい気持ちよくて……どーにかなりそうなのも、アリかなぁ、とは思いました、けどぉ……」

陽奈　「……うう、はい……おまんこ壊れちゃいそうなくらい責められるの……すっごい興奮してましたー……」

陽奈　「でも、先輩……こんなことして、フツーの女の子だったら、許してくれないっすからね？」

陽奈　「こんなエッチに付き合ってくれるのなんてあたしだけなんですから……ずっとずっと、恋人でいてください、ね……？」

陽奈　「あたし？　あたしはずっと……先輩のこと、好きですよ。多分ですけど、一生大好きです」

陽奈　「……好きです、先輩。あたしのこと、こんなに愛してくれて、ありがとうございます……」

陽奈　「ちゅ、ん……ちゅむ、ん……ちゅうう……えへへ……大好き、先輩……♪」

●トラック7

陽奈　「ふいー、いいお風呂でしたねぇ」

陽奈　「先輩の顔、ゆでダコみたいに真っ赤になってるっすよ？　そんなにお風呂、熱かったかなぁ」

陽奈　「あたしの身体心配してくれてるんですか？　……あはは、ご心配ありがとうございます」

陽奈　「あんなの、フツーですって、フツー。だって、あれくらいしないと、あたしがどれだけ先輩のこと好きか、伝わらないだろうし」

陽奈　「それに、先輩もすっごい満足そうな顔してたじゃないっすか」

陽奈　「あーいうエッチが好きなら、いつでも付き合ってあげますよ」

陽奈　「おちんちんイジメるみたいなのとかー、くっついてラブラブなエッチとかー」

陽奈　「ふふー、先輩はどれがよかったっすかー？」

陽奈　「……恥ずかしがっちゃって。もー、ホントに可愛いなぁ」

陽奈　「先輩って奥手なとこがあるからー、やっぱりあたしがずっと付いていてあげないとダメっすね！」

陽奈　「ふふ、決めちゃいました。あたし、大学は先輩と同じとこ行きます！」

陽奈　「あ、いや別に……先輩のためだけじゃ、ないっすよ」

陽奈　「あたしが、その……先輩とずっと一緒にいたいって思う……ですから……」

陽奈　「むー、あたしに恥ずかしいこと言わせないでくださいよっ！　それくらい察するっす～！」

陽奈　「……えへへ、でも嘘じゃないっすからね。あたしがずっと、一緒にいたい、って思ってるのは」

陽奈　「これからも……ずーっとずーっと、一緒にいましょうね。大好きです、先輩♪」